

いじめ傍観場面での援助抑制理由の検討

—当事者の人間関係と傍観者の類型化に着目して—

心理相談室 研修生 岡本 真穂

1. 問題と目的

いじめ研究は1980年代頃より多くの研究者により行われてきた。当初はいじめの発生メカニズムを明らかにする研究が多く見られたが、近年では森田・清水（1986）の「いじめの四層構造論」をベースとした理論が提唱され、学級全体でいじめを捉えようとするものが多く見られる。「いじめの四層構造論」とは、いじめを被害者と加害者に加え、「観衆」と「傍観者」を含めた四層構造で捉える考え方であり、「観衆」はいじめに直接手を下さないものの、いじめを周囲で面白がったり冷やかしたり囃し立てたりする存在で、「傍観者」はいじめが行われているのを知っているが、いじめを見て見ぬふりをする存在であるとされている。また、「観衆」はいじめを積極的に是認し、「傍観者」はいじめを暗黙的に支持するため、いじめに抑止力が働かない・いじめ行為がエスカレートすると論じられている。坂西（1995）では、傍観者は、いじめの加害者や被害者への働きかけを通して、被害者の心理的苦痛の低減やいじめの停止・抑制に効果的な存在になり得ることを示している。更に、伊藤（2007）では、いじめに関わる人の立場の入れ替わりがあることは明らかになっている。いじめ問題をより深く考察する上でいじめ場面での役割や立場についての検討は不可欠である。

住田（2007）は、いじめのタイプ化を試みている。その中のⅡ型（加害者がある特定の人物を対象にいじめを繰り返し、それがいじめであると十分に認識しているものの、自分の行為によって相手が感じる苦痛には無関心）では、仲間との集団的活動に興味関心があるとし、仲間との一体感や連帯感、集団的興奮による快感や

充実感を優先するとされる。しかし仲間同士の結びつきが強いとは限らず、むしろ結びつきが弱いからこそ、仲間との一体感や連帯感を維持したいという欲求を持ち、それまで集団的活動を共にしていた仲間であったとしても、一転して「いじめ」の標的に移行させたりすることが示されている。このことより、傍観者には集団に所属していたいと思う欲求やその集団への自身の適応を満たすための同調行動を重要視している可能性があるとも言え、いじめへ介入することで集団から逸脱するのではないかという不安が起り、援助行動を抑制しやすくなることが考えられている。また、大坪（1998）の小学生を対象にした研究結果では、援助行動の抑制要因には、「事態の肯定」、「被害者への帰属」、「いじめへの恐怖」、「評価懸念」、「事態の悪化への懸念」、「事態解決糸口のなさ」の6つが考えられており、各要因で性別による有意差が見られる。男子のほうが女子と比較して、「いじめを見て面白がる」という理由から、いじめに対する「事態の肯定」意識が強いことが示されている。また、「いじめの原因は被害者にあるのだから、この仕打ちはむしろ当然」といった「被害者への帰属」意識が強いことも示されており、これらが援助行動の抑制要因として有意に影響していることが分かる。一方で、女子のほうが男子よりも、「加害者・被害者の両方と友達である場合」、「加害者と友達である場合」、「被害者と友達である場合」、「加害者・被害者の両方と友達でない場合」のいずれの人間関係においても、「いじめに対する恐怖」が強いことが示されており、これらが援助行動の抑制要因として有意に影響しているとされている。

このように、いじめ傍観者の行動がいじめ自体にもたらす影響は大きく、いじめ抑制につながる可能性が考えられている。一方、いじめ加害・被害者との人間関係やいじめのタイプなど、様々な要因によって、傍観者の援助行動が抑制されることも示されている。また、いじめ

傍観者の中にも、いじめに対する捉え方が異なる立場の者がいると予想される。そのため、本研究では傍観者に着目し、いじめを取り巻く人間関係と傍観行動の関連性を検討することとした。また、傍観者をその質的内容によって類型化することも目的とした。

II. 手続き

大学生を対象とし、134名（女性115名、男性17名、その他2名）が参加した（2021年11月～12月）。蔵永ら（2008）のいじめ関連行動の測定項目、久保田（2008）のいじめ傍観者の援助抑制理由を用いて回想法の形で質問紙調査を行った。架空のシナリオは、現代の中学・高校生の間で発生しやすいと思われるインターネットを介したいじめや関係性いじめの場面を設定に取り入れて作成した。なお、関係性いじめとは、無視や仲間外れなど関係性攻撃を手段とし、加害者が被害者の対人関係に危害を加えることで苦痛を与える（Feshbach, 1969; Feshbach & Sones, 1971）ものである。

III. 結果

1. 人間関係といじめ目撃後の行動

当事者の人間関係といじめ目撃後の行動の関係を、人間関係を独立変数、「いじめ関連行動の測定項目」の下位因子の合計得点を従属変数として、1要因参加者間分散分析により検討したところ、「被害者援助行動」因子と「傍観行動」因子のどちらにも1%水準で有意な主効果が見られた（順に $F(3, 130) = 5.83, p = .001$ ）、 $F(3, 130) = 6.22, p = .001$ ）。よって、被害者とも加害者とも親密ではない場合は被害者を援助する行動を起こしにくく、被害者と親密である場合と比較して加害者と親密である場合と被害者とも加害者とも親密でない場合は傍観者の立場を取りやすいことが示され、仮説は支持された。

2. 人間関係と傍観理由

いじめ関連行動の測定項目の「被害者援助行動」以外の項目に1つでも4または5点と回答した人を「傍観者」、そうでなかった人を「傍観者でない」と分類する。

いじめ傍観者の援助抑制理由の下位尺度因子得点を独立変数、人間関係と傍観者か否かを従属変数として、2要因参加者間分散分析により検討したところ、「いじめへの非力性」因子にも「非当事者性」因子についても主効果に有意差は見られなかったが、傍観者については傍観者でない人よりもいじめ対処への効力感の低さや当事者意識の低さを感じる事が示唆された。

3. 傍観者の類型化

傍観者の類型化を行う目的で、「いじめ傍観者の援助抑制理由」の傍観行動因子の得点を基準として、クラスター分析を行い、「傍観傾向低群」「当事者回避群」「非力性・非当事者性高群」の3群を抽出した。「傍観傾向低群」は傍観行動を取ることが少なく、「当事者回避群」はいじめを他人事のように感じているため傍観行動を取り、「非力性・非当事者性高群」はいじめ対処への効力感の無さと当事者意識の低さの両方から傍観行動を取るという特徴があることが判明した。

4. 傍観理由が行動に与える影響

いじめ関連行動の測定項目の「傍観行動」因子を基準変数、いじめ傍観者の援助抑制理由の「いじめへの非力性」因子と「非当事者性」因子の得点を説明変数とする重回帰分析を行ったところ、いじめ場面での傍観行動について、いじめ対処への効力感の無さやいじめに対する当事者意識の低さが正の影響を及ぼしていることが判明した。

IV. 考察

以上のことより、いじめ場面における傍観者

の生起には、いじめにどう対応して良いのか分からないことや、自分といじめは関係のないことだと認識することが関与していることが明らかとなった。また、当事者らの人間関係について、「加害者とも被害者とも親密でない場合」では被害者への援助行動は生起しにくく、「加害者と親密である場合」「加害者とも被害者とも親密でない場合」は被害者と親密である場合と比較して傍観行動が生起しやすいという結果が得られた。これは大坪（1998）の研究と同様に、第三者の立場にある者が、特に被害者と友達関係にあるか否かが第三者の傍観行動を抑制することが示され、傍観者の援助的な行動に影響を与えうるだろう。このことから、被害者と加害者の両者ともが傍観者と友達でないという人間関係が、いじめ場面で被害者・加害者らとの間に疎遠な距離感を生み出していることが推測される。つまり、親密度の低さが、いじめの場面においても被害者・加害者らとの間に一定の距離を生み、事態の推移を見守る傍観者の行動が見られやすいのではないだろうか。被害者と親密な関係にあるかどうか、傍観者の生起の抑制や被害者への援助行動を促進する上で鍵となると言えるだろう。

また、いじめにおける加害者・被害者・傍観者の人間関係と傍観行動の生起理由について、2つの間に関連は見られなかったが、「傍観者か否か」の要因の主効果は有意であった。そのため、いじめ傍観者は傍観者ではない者と比較して、いじめへの効力感の無さやいじめを他人事として捉える傾向にあるということが示唆された。

傍観者の類型化を検討したところ、3つのタイプに分類できた。そこから、自分にはいじめが関係ないと感じる気持ちや、傍観者効果を引き起こす「対処法の無知（どのように対処するのが適切なかがわからない・知らない）」が大きく影響していることが判明した。

V. 今後の課題

本研究も用いた傍観者意識尺度の「加害者支持」因子や、いじめ関連行動の測定項目の「はやしたて行動」因子に該当する項目には大きな偏りがあり、いずれもフロア効果が検出された。本研究ではいじめの場面を「関係性いじめ」やインターネットを介したものを設定しているため、もし暴力などの直接的ないじめ場面の設定であれば「加害者支持」「はやしたて行動」をする「観衆」が存在する可能性も考えられるのではないだろうか。そのため、現在のいじめにはどういった状況のものが多いのか等を詳細に調べる必要があると考える。

傍観者自身が「傍観者でいること」を自覚した上で、対処法が分からないから仕方がない・自分は悪くないと正当化する者も、従来のいじめ研究で言われてきたような傍観者（助けたいと思いながら行動できない自分に葛藤を覚える）者も、両方存在する可能性があるため、今後更に「傍観者」の内実を細かく見ていく必要がある。

引用文献

- Feshbach, N. (1969). Sex differences in children's modes of aggressive responses toward outsiders. *Merrill Palmer Quarterly*, 15, 249-258
- Feshbach, N., & Sones, G. (1971). Sex differences in adolescent reactions toward newcomers. *Developmental Psychology*, 4, 381-386
- 久保田真功 (2008). いじめ傍観者の被害者への援助抑制理由とその規定要因に関する分析 - 大学生を対象とした回顧調査をもとに - 子ども社会研究 (14), 17-28
- 蔵永 瞳・片山 香・樋口匡貴・深田博己 (2008). いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響 広島大学心理学研究, 8, 41-51

- 餅川正雄 (2011). 学校のいじめ問題に関する研究 (IV) 広島経済大学研究論集34, 2, 65-84
- 森田洋司・清水賢二 (1986). いじめ—教室の病い— 金子書房 (新訂版 1994)
- 岡本真穂 (2022). いじめ傍観場面における援助抑制理由の検討 - 傍観者の類型と当事者の関係性 - 神戸女学院大学大学院修士論文 (未公刊)
- 大坪治彦 (1998). いじめ傍観者の援助抑制要因の検討 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編50, 245-256
- 坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響及び被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115
- 住田正樹 (2007). いじめのタイプとその対応 放送大学研究年報, 25, 7-2